



櫻齋房種壽

島鮮堂壽梓

六編下

岡本勘造

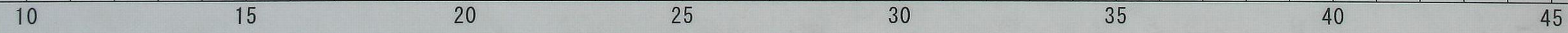
糴町

六編中

芳川俊雄

其名高橋  
毒婦の小傳  
東京奇聞

六編上









旅人宿梅屋治兵衛

子安の茶

此名もろは

素婦の小傳

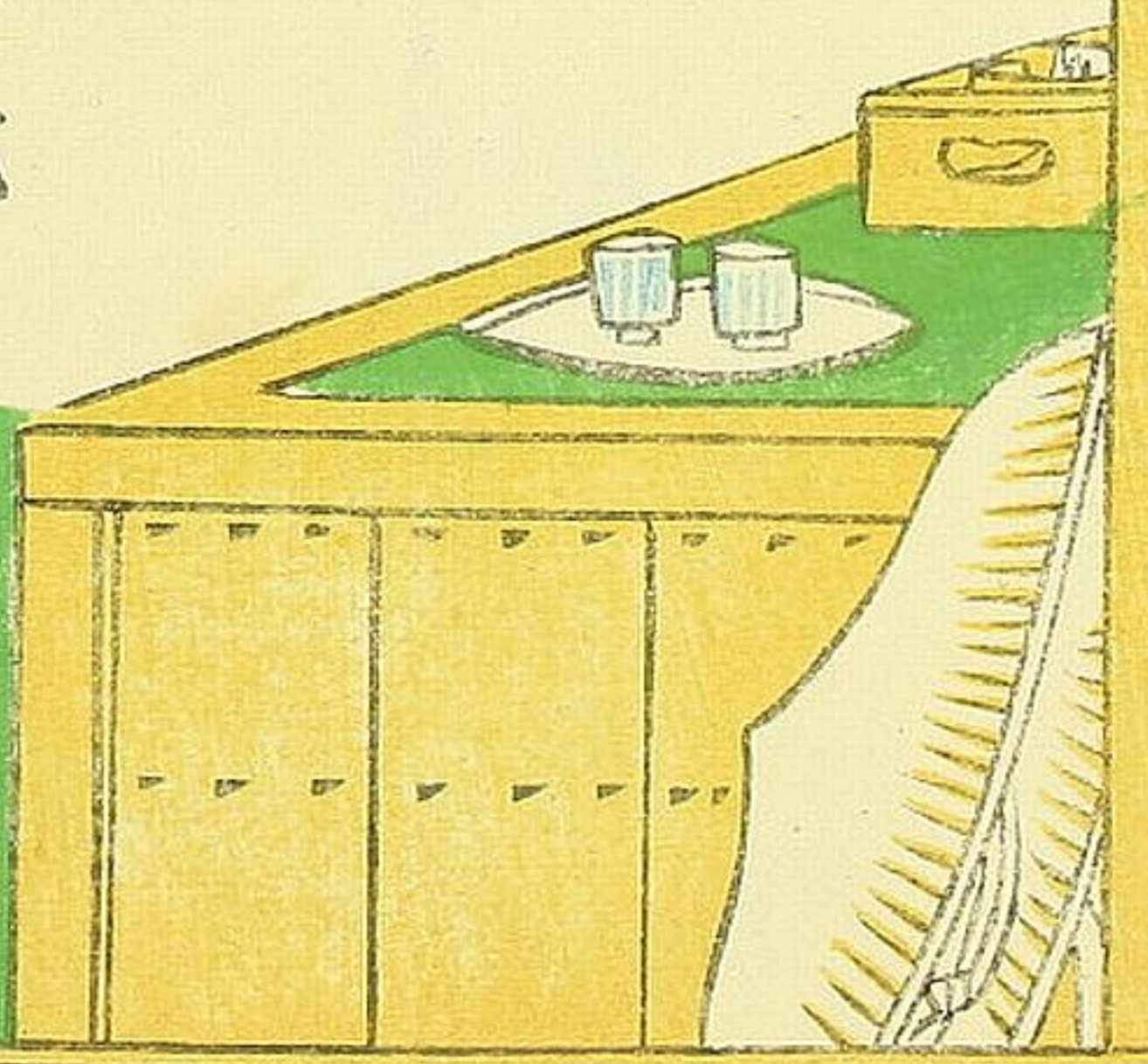
# 東京新聞

芳川俊雄閣 才六編

園本勲造綴 上の巻

桜島月経画

島鮮茶



俗の傳ハ傳信の傳ハ一傳記ハ電氣に音が通ハ記者の音ハ  
 瀛車小紙ふりあつて何れも迅い本報とラランクリンが紙文鳥や  
 雲あけと五編までの拙撰を少くも咎め玉はずエレキ坊  
 加減のウレク子の次第にかきむ積極の度とを何れもさ  
 島鮮堂の後とも急いで疾くかまよと促がす使ひら度や  
 をれとワットが薬罐の湯氣に似てキシヤハ此の逆上  
 頭痛にちやむ折なれハ氣力を少く緩めりも六辨がハハ  
 差加る彼高橋の大変なる場所の態々念を入世して最早  
 フミキリにも程近ければ看客に長くハ欠をさせませぬ

明治十二年三月下旬

岡本起泉題







方寸六上

方寸六上



明治七年二月日

敬言視第三方面二分署



五編のついで

○却説於本演次第一倉川  
 事お子にれがさううと承知も  
 ありうて倉川に如何せんおと尋ね  
 おお徳の教へおけさるれを備へにま  
 めて漢紙宛お向いお若さん味ま  
 のお紙の名前でも紙をあげて  
 不都合ならうとあつてお若さんの  
 名前をわらわためさアお同さ  
 初め其の事いめつてあつた一日  
 お若さんかおまの給へ平若さんか  
 来て如何におまの番の事か  
 俄におまの方にお遠があつて  
 金子の歌道が出来ぬえ  
 二件ハ出つると  
 事お子にれがさううと承知も  
 ありうて倉川に如何せんおと尋ね  
 おお徳の教へおけさるれを備へにま  
 めて漢紙宛お向いお若さん味ま  
 のお紙の名前でも紙をあげて  
 不都合ならうとあつてお若さんの  
 名前をわらわためさアお同さ  
 初め其の事いめつてあつた一日  
 お若さんかおまの給へ平若さんか  
 来て如何におまの番の事か  
 俄におまの方にお遠があつて  
 金子の歌道が出来ぬえ  
 二件ハ出つると

48-7961



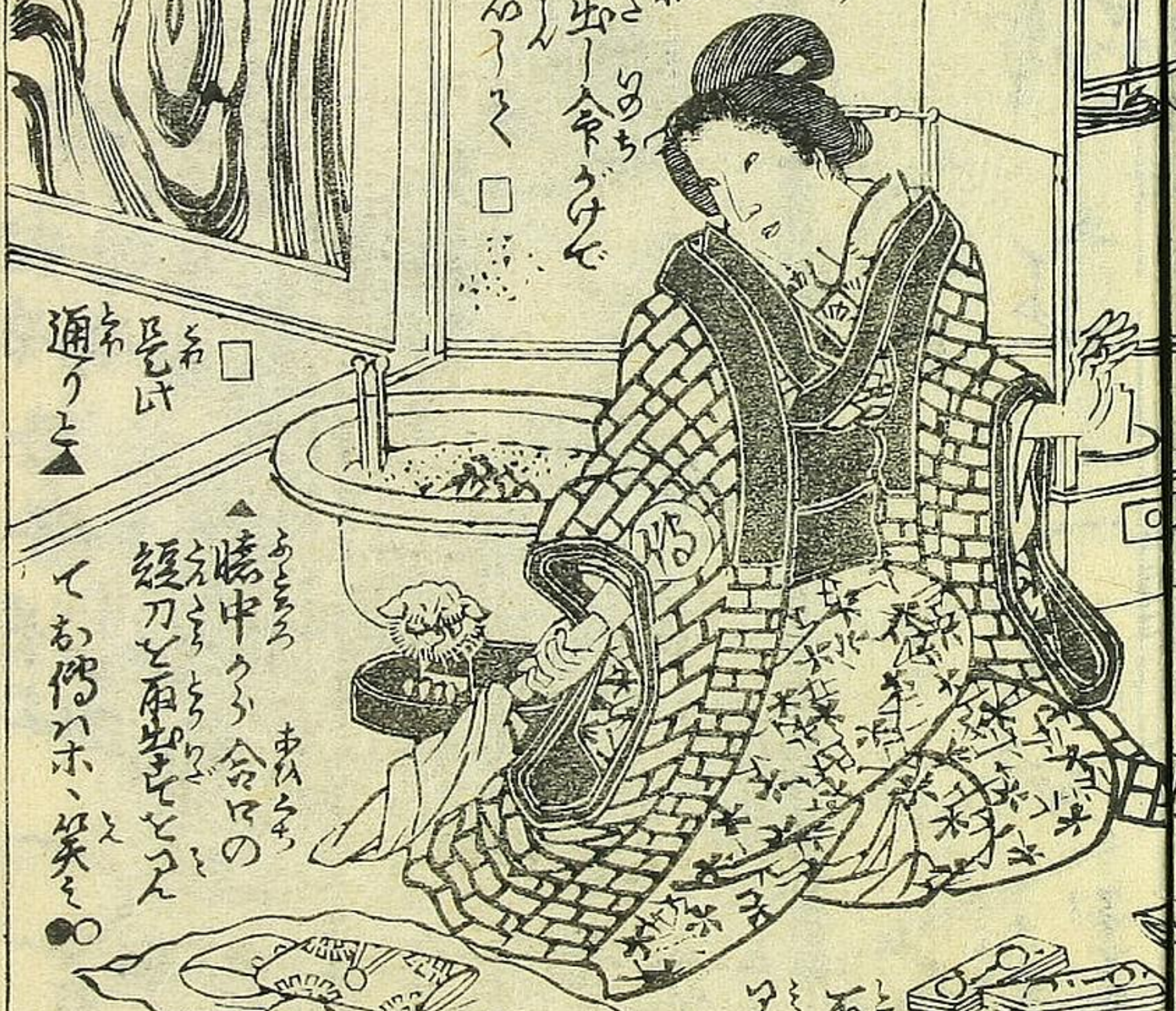
つぎ返せし今一層この地券を  
 悪法とやらんものありと知れぬ  
 彼は罪の著しきものなりはれぬ  
 二條より地券を押しつゝ  
 お借し教多き乳とのてきき  
 際をやめ親族共が形なき  
 此の金川が首尾よく  
 金と利達との共  
 け方々あつて  
 備を返さねばならぬ場合あり  
 先うすおつられけりう二百三  
 十田の約地がつけられ上り地は合  
 ぬて実



○オ、までもきこつたの  
 肝をあらうの程母  
 しく危あつく  
 親とて由一の

あつて  
 出た  
 座下  
 と  
 小色

今宵金  
 川におきて  
 糸備の二  
 百田と征文金あり  
 ちめて地券と返して  
 くれとをあげまじと承知  
 せすの石原辺へおひれ出し今うひて  
 地券と返さんと決りし



通うと  
 腰中うら合の  
 経刀と有物と  
 てお傳へ、笑



【おき】教習よりなるが、あつ

次男と知事とを兼ねる

に地券を所せしと云

と云ふより二人の酒と

よび青と面を

美小懐状と云

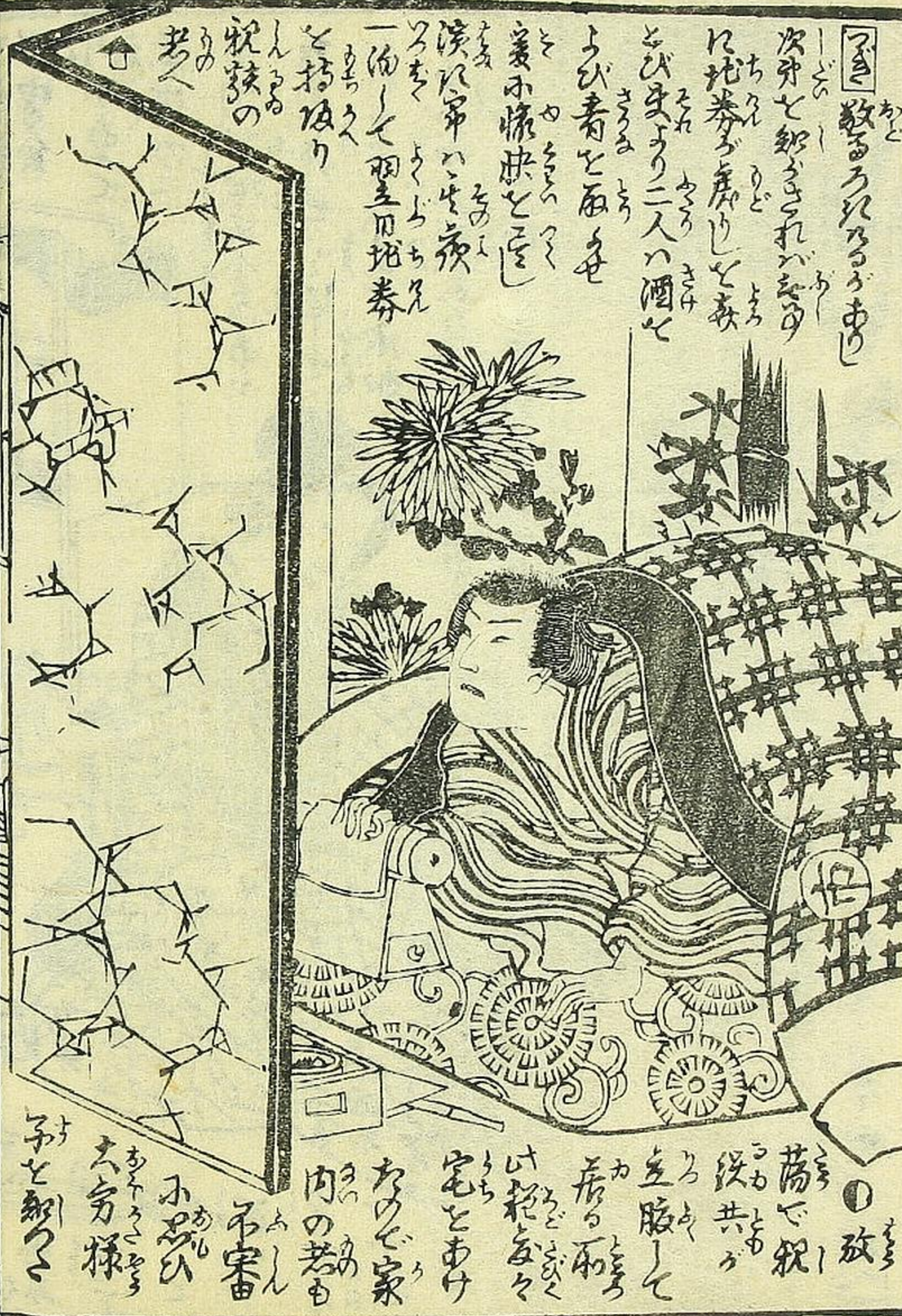
漢以常いそ夜

一泊して羽と地券

と持取り

祝状の

考へ



○放

蕩で祝

段共

左腕して

片の取

け籠を

宅と申

わのて家

内の若

不審

小忍び

大勇様

予と知つ

【おき】

安ん

さ

お借と

常絶田へぬあつて

夜毎ふ通へどい家の別

る小市を年が泊りぬて

お借とこととをさるとし知れねば以上

お借とこととをさるとし知れねば以上

お借とこととをさるとし知れねば以上

お借とこととをさるとし知れねば以上

お借とこととをさるとし知れねば以上

お借とこととをさるとし知れねば以上

お借とこととをさるとし知れねば以上

お借とこととをさるとし知れねば以上

お借とこととをさるとし知れねば以上

大正十一年



のが押さか

祝状

お借と

常絶田

夜毎ふ通

る小市

お借と

お借と

お借と

お借と

お借と

お借と

お借と

お借と

お借と

お借と

お借と

お借と

お借と

お借と

お借と

お借と

お借と

お借と

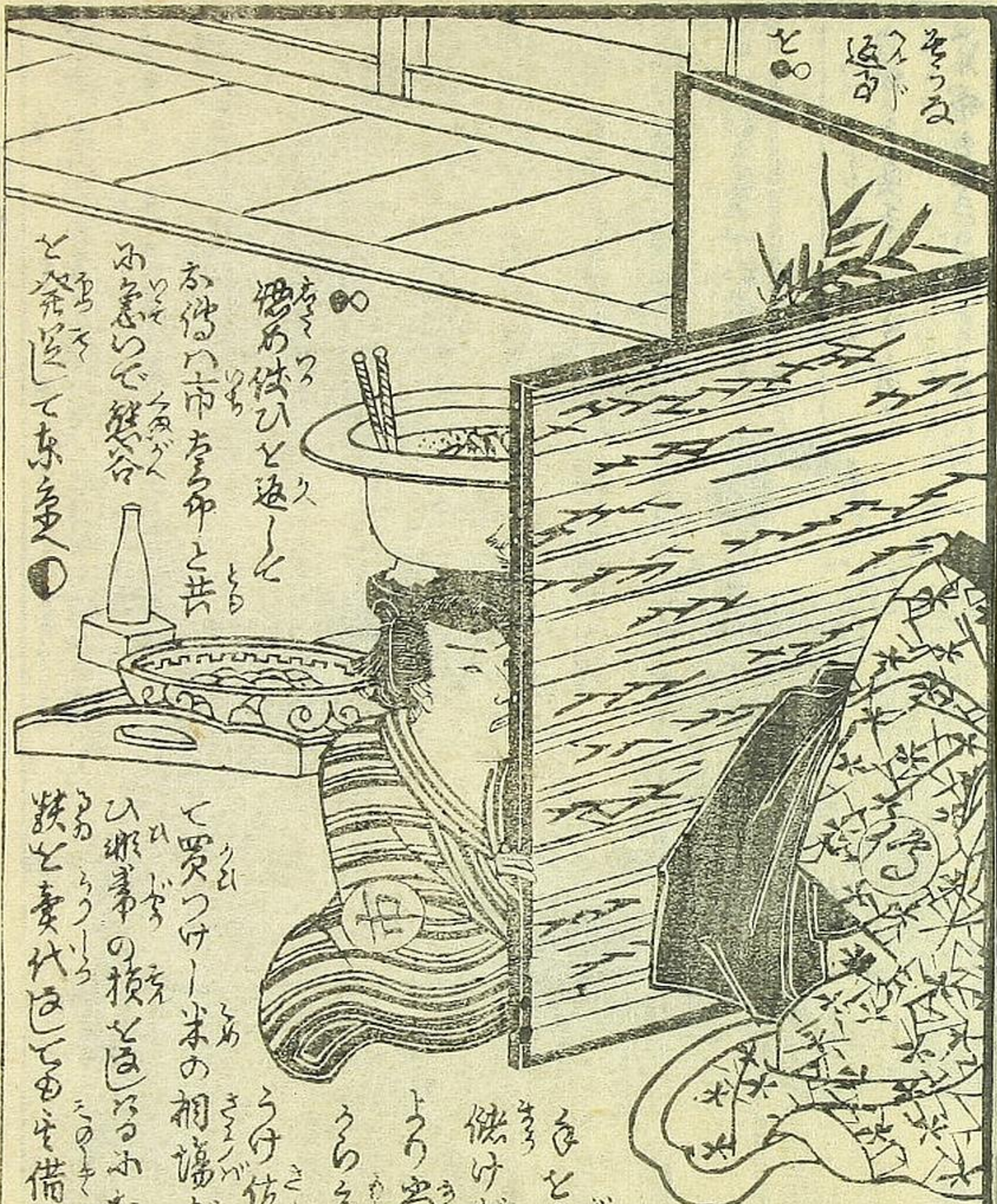


一も新枝共が尋ねておるも  
 細れねが一先東条へ立寄りさう  
 三浦で待つておる中内膳しんが  
 ありさうされぬらな尋ねてお  
 りとに涼亭とせうの表でこれ  
 と句惚さう文面もおくか  
 少一氣の表をさけ換ふ  
 どのまゝ縁があらうか合一  
 どのうらひの道にぬれと  
 寄正にさうと市を  
 寄がのふまゝせと

法世が糞所の  
 宅の涼成もは怪  
 にはてあれど  
 涼亭の  
 金川  
 寄方面  
 出が知  
 東ねが涼後さう  
 寄所二丁目の  
 涼り迎も涼成  
 涼入寄梅  
 寄方へ

他人の  
 名を  
 出さ  
 止宿の  
 ことか  
 世と市を  
 何の商法も使  
 直のふあ養て  
 鬼市で懸念  
 小せ一兵兵

▲想



佐七といふ  
 お湯の  
 方へ同  
 して相  
 橋のうら  
 ごと出て  
 供けがあり  
 より寄もお借  
 うらえを借  
 うけ佐七と涼つ  
 て買つけ一歩の相  
 借が借おれ  
 ひ涼亭の換とほ  
 借が夜  
 踏と妻代は  
 借の

徳めはひと返  
 お借の市を  
 用意の  
 と寄して東

と。返が

と寄して東

次へ

















**ひき** その時や

慶賀ハニツ山小敷ひやせト

あつに接用内伝のしりて

人小睦られどとあつに怒と

声とさうしまさう秀と

鏡の残らまの

やうにの目

の文方

まて不慮

あけてあて下さうとあつ

秀決のむつれあまのまするまとツウ

はあけてお月あかけやすさうら毎なあり

かとうと船墓の行なはぬとめく

秀

次希が後え

送つてあてん

台

合にツウ

け奴ア市

さんより中々

扱ふたちをさうり

とりふとれふ年の

号花

がツドン

お、吃

敬

あつ

あつ

あつ

あつ

あつ

あつ

あつ

あつ

あつ

**鹿兒島紀事**

六冊

**東京區分繪圖全**

**獸類一覽かゝた**

其名も高橋 **東京奇聞** 初編 追出版

**粉色入小本數品**

**御所櫻梅松録** 十五編

**仇優忠臣藏折本**

**大功記銘々傳** 四冊

**新板双六類品々**

**龜** 地本 **問屋**

荒町区一番丁卅七番地  
編輯人 岡本勘造  
浅草區瓦町十二番地  
出版人 網島龜吉











北より南と云ふ

新婦結小唄

東京奇聞

六海中の巻

芥川俊雄園

長水勸進帳

横濱府経典

鳥鮮之海



○中山道  
 道傍の  
 巢宿  
 の小  
 池  
 の縁  
 の奥に  
 今宵酒に  
 三人連の旅  
 人の  
 足と

▲船にのぼると雲谷候七ヶ倉の車でお鹿が痛のふりやうで後泊  
 新婦榮と伴ふて天麻生 華小あつて茶の買付てあ大麻  
 赴む途中小のお宿へ茶葉候 生と茶の葉谷くらげと新婦と  
 と長柄くと敷まの金の威光と ある子と向ふ宿の茶とのとあつら  
 ちる自たりは内茶候のわゆる 不三懸谷うらまでまが今日懸谷ま  
 白の天林檎であらふ長 仍も茶の板引の昨日のよと後泊でも  
 休とまされれぬ内に 明日の内ぬれ候が出来ませすまは二月と  
 懸谷まをゆくのぞ けつてもまが今日懸谷  
 あつた松が風のふ指 曆の二月二日山のま  
 かもあはれまが 日あはれとあま

從是北 中山道鴻巣驛

明治九年三月



つぎ 夕方の別てまゝに独り  
くま四里八町の懸谷世に殊も  
あつてとあつてまゝに治りあひ

あつてとあつてまゝに治りあひ  
下女が風呂にめ  
まをの葉内お茶ぬい

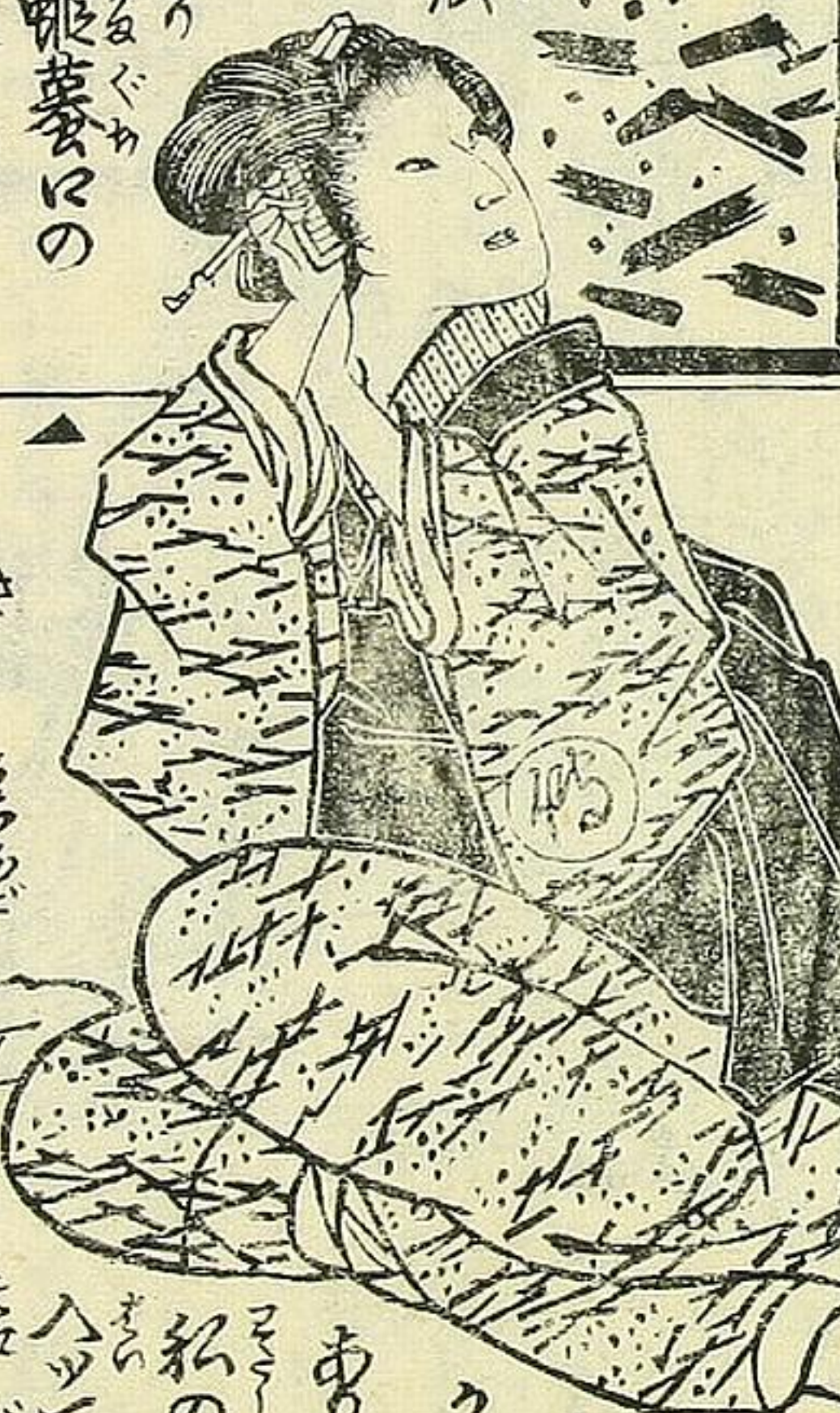


あつてとあつてまゝに治りあひ  
あつてとあつてまゝに治りあひ  
あつてとあつてまゝに治りあひ  
あつてとあつてまゝに治りあひ  
あつてとあつてまゝに治りあひ

又依七と共々か  
風呂に入り



あつてとあつてまゝに治りあひ  
あつてとあつてまゝに治りあひ  
あつてとあつてまゝに治りあひ  
あつてとあつてまゝに治りあひ  
あつてとあつてまゝに治りあひ

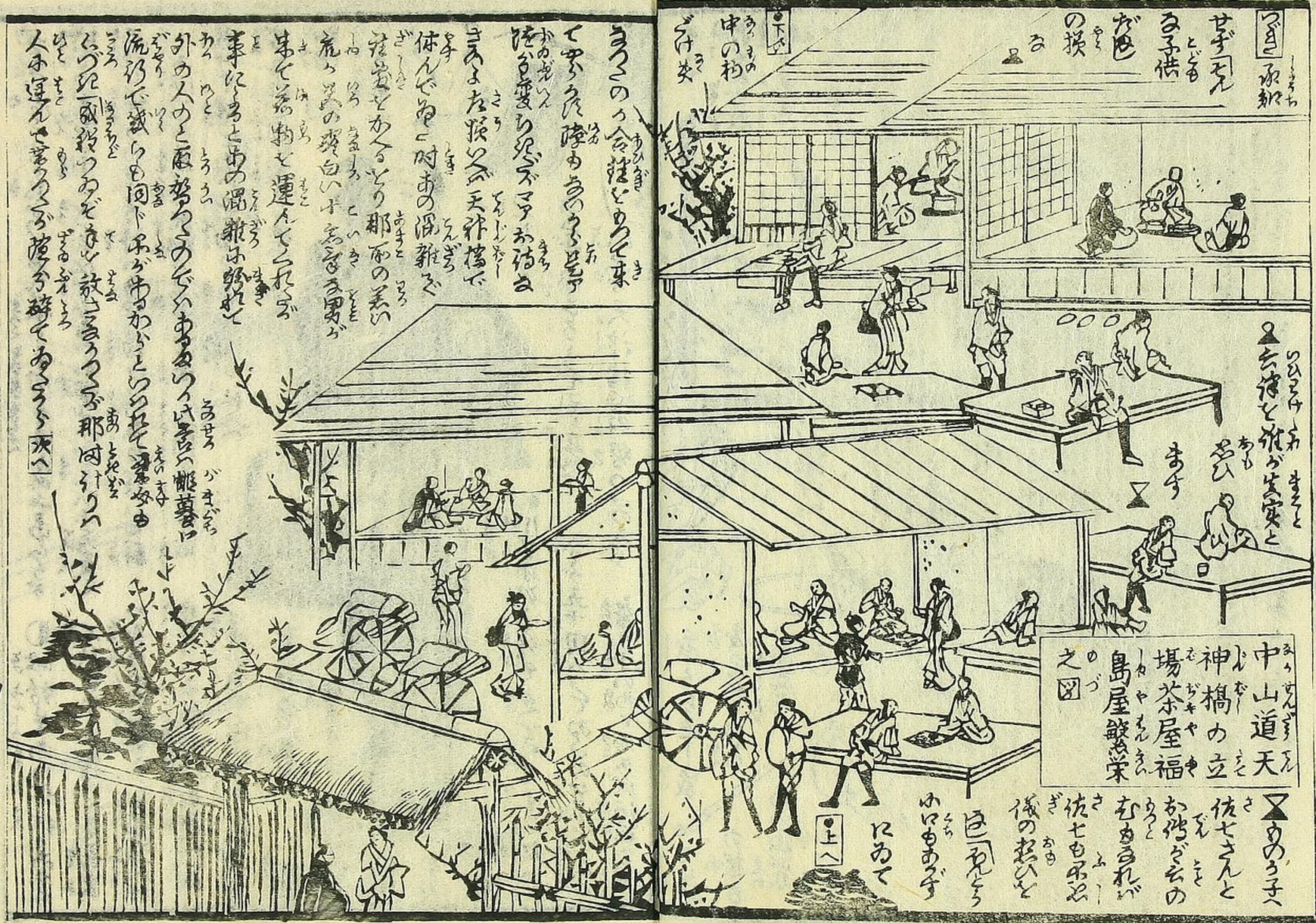


あつてとあつてまゝに治りあひ  
あつてとあつてまゝに治りあひ  
あつてとあつてまゝに治りあひ  
あつてとあつてまゝに治りあひ  
あつてとあつてまゝに治りあひ









ついでに

茶屋

の子供

の換

の換

申の杓

の杓

の杓

の杓

の杓

の杓

の杓

の杓

の杓

の杓

の杓

の杓

の杓

の杓

の杓

の杓

中山道

神橋

場茶屋

島屋

之図

之図

之図

之図

之図

之図

之図

之図

之図

之図

之図

之図

之図

之図

之図

之図

之図

中山道

神橋

場茶屋

島屋

之図

之図

之図

之図

之図

之図

之図

之図

之図

之図

之図

之図

之図

之図

之図

之図

之図

中山道

神橋

場茶屋

島屋

之図

之図

之図

之図

之図

之図

之図

之図

之図

之図

之図

之図

之図

之図

之図

之図

之図





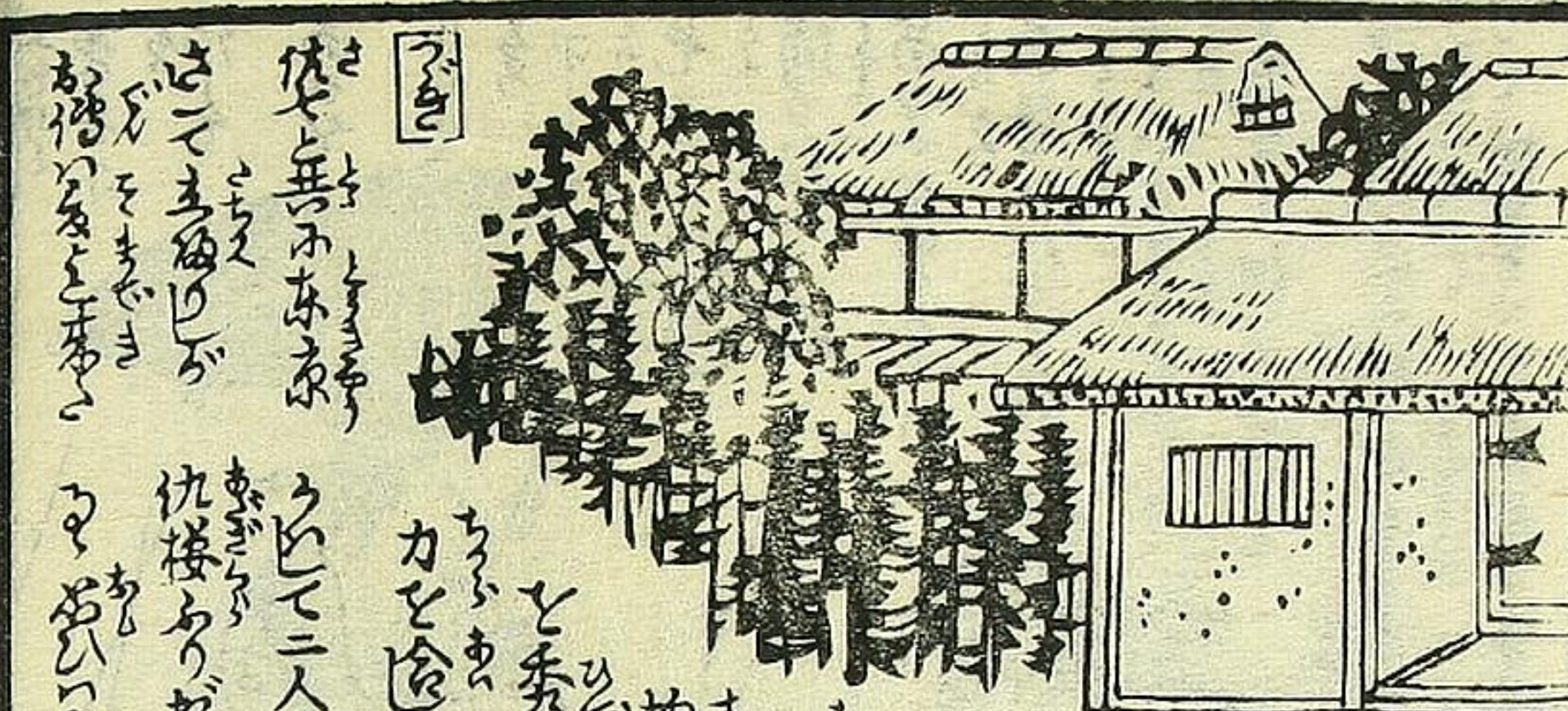












兼て秀次弟正合世にて中  
 吉近次小池と主出時  
 屋との宿屋の運  
 一とある秀次弟が伴あり  
 首尾よく事と遂なる  
 隙とある又兼助と関はせ  
 一と探して互ひあはれ  
 梅之根葉の令子を改めて  
 と秀次小池へ高け法をいひは事  
 カを捨てて互ひあはれと結らひつ  
 うにて二人とも決けり  
 仇接ありたすあま  
 おぼやかしき  
 ちか  
 ちか  
 ちか

道中もあつて  
 沖の島に  
 とりて  
 のあひ  
 ちか  
 ちか  
 ちか



大馬生  
 生かぬえと  
 天林橋の  
 天林橋の男女

後び今宵は  
 今宵は  
 天林橋の  
 天林橋の男女

小あり  
 一たり  
 今宵  
 天林橋の男女









あつたまも途程一せし上るるると云ふ  
つゝ後ほど急ぐ木下雷ツキの如し暗き  
風の音もゆふをまのてたさけ方の歳時  
慌て延おそ一人の男がハツナリ秀次小突  
あり後ふトウと倒るゝふぞ秀次へあか  
● 通ひされるる上落と

● 声と知一騒るるるるる  
形もたのめ御一  
わいぬ若者おれど  
今年もおぼげはるに  
素直心であらとさるるる  
仔細あらんとあへどもまを尋ね  
● 手控縁のまねねが  
通と出せし  
と止めたるの珠  
● 等け奴必之田舎の  
大を高坊女帯に現と  
振一あ小傑とせんを

東京區分繪圖全 鹿兒島紀事 六冊

命之養生善惡鏡全 獸類一覽かるた

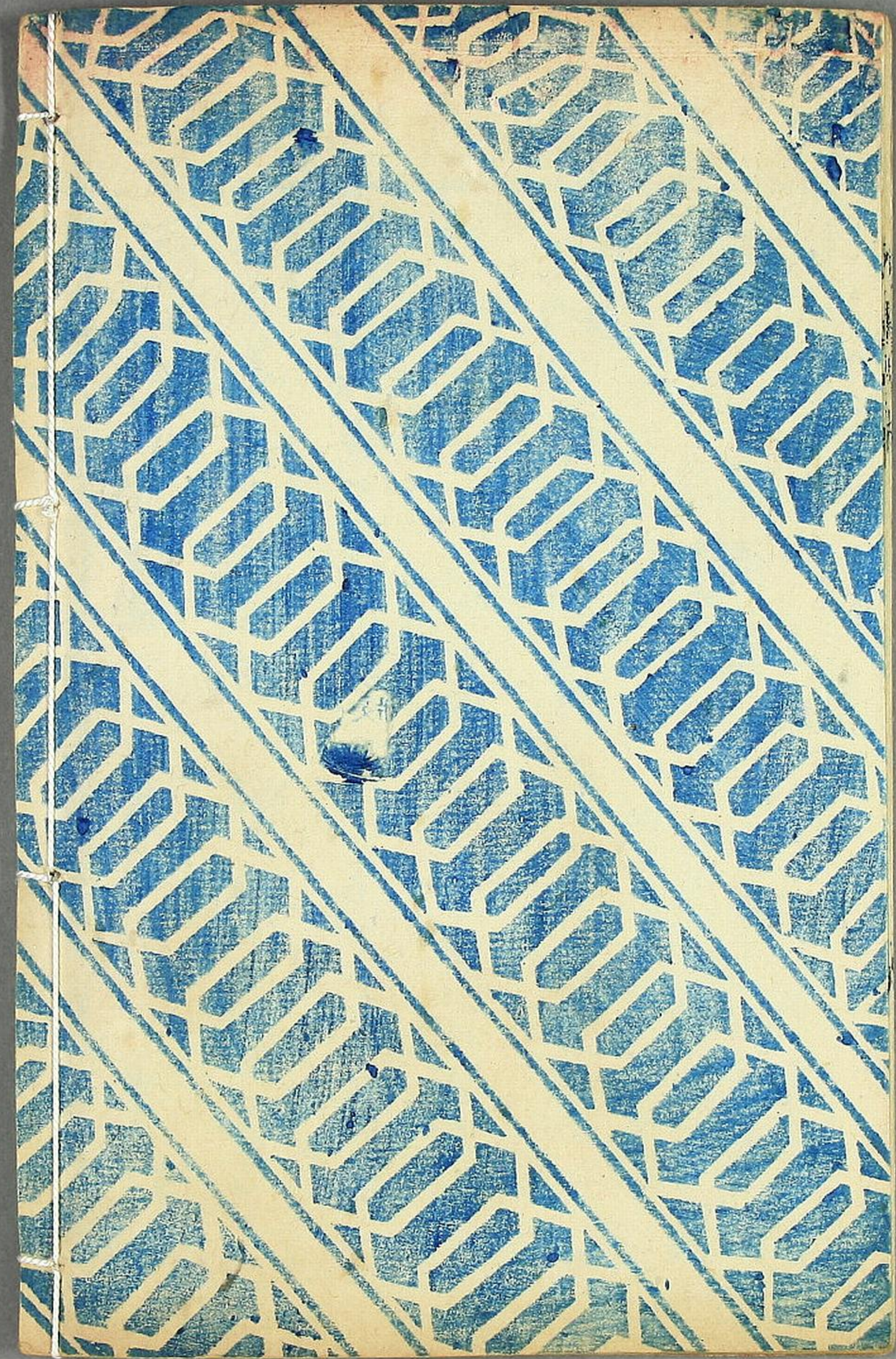
其名も高橋 東京奇聞 粉色入小本數品

御所櫻梅松録 十五編 仇優忠臣藏折本

大功記銘々傳 四冊 新板双六類品々

龜地本問屋 編輯人 岡本勘造 浅草區瓦町十二番地 出版人 綱島龜吉

















● 辻堂でもおれはうらぐとるん  
 此後の藪どろれとけなぐくと  
 のひらぐり現れぬる人  
 の曲者者と危うい  
 寒さうり管の内小眼ん  
 あつ青二才的まうは地へ  
 束のてあらうと信受の  
 細の目機之形麻の襦  
 己の役のせりおされとる  
 めのうツツとは柄と焼つて  
 みるゝと実徳歩次はさつて  
 かるおのぬんぬん云々  
 とおひが云々あてあ



● ぬん絨木用あめえ  
 せつせんすと先不遊  
 絨子  
 組子  
 利統  
 雨て様  
 上るが  
 左りの  
 絨の  
 横  
 後を  
 里まてはと踏とが  
 せつとと仰げたは

● 急いで途中路に逢ふ  
 ては操へ出候たか何由怪し  
 ともうません徳谷在の大藤生とつふ所の袴市  
 濱の舟と申止者心さういすすとつて秀はひ不審  
 おもひまするも居さへいふ京のお借といふ事  
 とおれど久「サア、さうお借しをさのむツツでいれ候後  
 当るさう知つたお借さんへ今日お居さんの方へ参りま  
 ねおりのりなりますうまのまふ袖へ種々お吐しが  
 あるが何分あたるまを吐し由出来ぬいさあらふ









ついでに 枕をく  
 内おぼい  
 看ま  
 我慢が  
 出来ねの

逃がれろと  
 奴のいふ

○ 御ふの根に  
 ついてのふへ  
 とこれと  
 ごも園の

あつた  
 切歯  
 小入  
 五十四  
 赤の金  
 形ま  
 横箱  
 さげ



一寸もあら  
 下してと

留まて人の性  
 幸ひ下  
 羽と達

ゆらね  
 抱きつ  
 機  
 に被

に被  
 機  
 抱き  
 ゆら  
 幸ひ  
 留ま  
 一寸

不  
 赤  
 多  
 の  
 提  
 さ  
 あ  
 つ  
 つ  
 ち

あ  
 つ  
 つ  
 ち















【不吉】 数谷辺とくわくとて宅と出さず、  
乃弟らを見ず今日海をうめ田の戻ると  
清と著せど者沙汰はお由もな海取つて  
末ぬの二人で逃亡し〜事々と  
親族とも相談して  
尋ねて〜  
乃先のみ然  
谷辺とわろ  
であしゆか  
らん俵うまい  
のいれを〜

【不吉】 数谷辺とくわくとて宅と出さず、  
乃弟らを見ず今日海をうめ田の戻ると  
清と著せど者沙汰はお由もな海取つて  
末ぬの二人で逃亡し〜事々と  
親族とも相談して  
尋ねて〜  
乃先のみ然  
谷辺とわろ  
であしゆか  
らん俵うまい  
のいれを〜



● 悪しき世の田を名田とあの  
通う任牌を  
撥らて  
借養を  
世も  
丸一奉

【不吉】 数谷辺とくわくとて宅と出さず、  
乃弟らを見ず今日海をうめ田の戻ると  
清と著せど者沙汰はお由もな海取つて  
末ぬの二人で逃亡し〜事々と  
親族とも相談して  
尋ねて〜  
乃先のみ然  
谷辺とわろ  
であしゆか  
らん俵うまい  
のいれを〜



倉川の女房於高  
か発狂する一段ハ  
七編にてつらる

【不吉】 数谷辺とくわくとて宅と出さず、  
乃弟らを見ず今日海をうめ田の戻ると  
清と著せど者沙汰はお由もな海取つて  
末ぬの二人で逃亡し〜事々と  
親族とも相談して  
尋ねて〜  
乃先のみ然  
谷辺とわろ  
であしゆか  
らん俵うまい  
のいれを〜



つぎ かねてあるて  
一 雨小か平者い

むらじこのうづり  
ちつこさう残  
らば後一由

あやうふまわ  
何れも内務に  
あいのけし子

強は家作  
の者人が  
はれはあ

のれ一年  
あまの西

出とせぬ  
のい不審

の二ツきひひ  
へ祝賀共も共

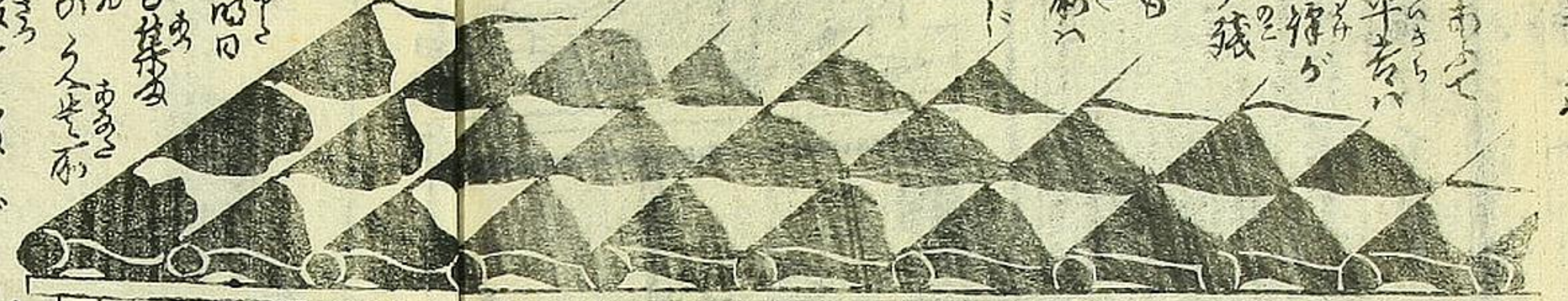
まては様投とあなすが  
おゆがまを車ふ白伏せま

とむるこぞ  
屯票の西厄女にあらか

あれねいも獲りて  
トと怒と怒る眼に涙

と懐め捨てたか  
あひかひ多紀事柄と初め

初てお救りは生由お傳ふ  
西谷再び地へ来る



# 梅治

のつてんと順ともそとく  
お傳ふ本女細と清と  
か傳ふ本女細と清と

か傳ふ本女細と清と  
か傳ふ本女細と清と

か傳ふ本女細と清と  
か傳ふ本女細と清と

か傳ふ本女細と清と  
か傳ふ本女細と清と

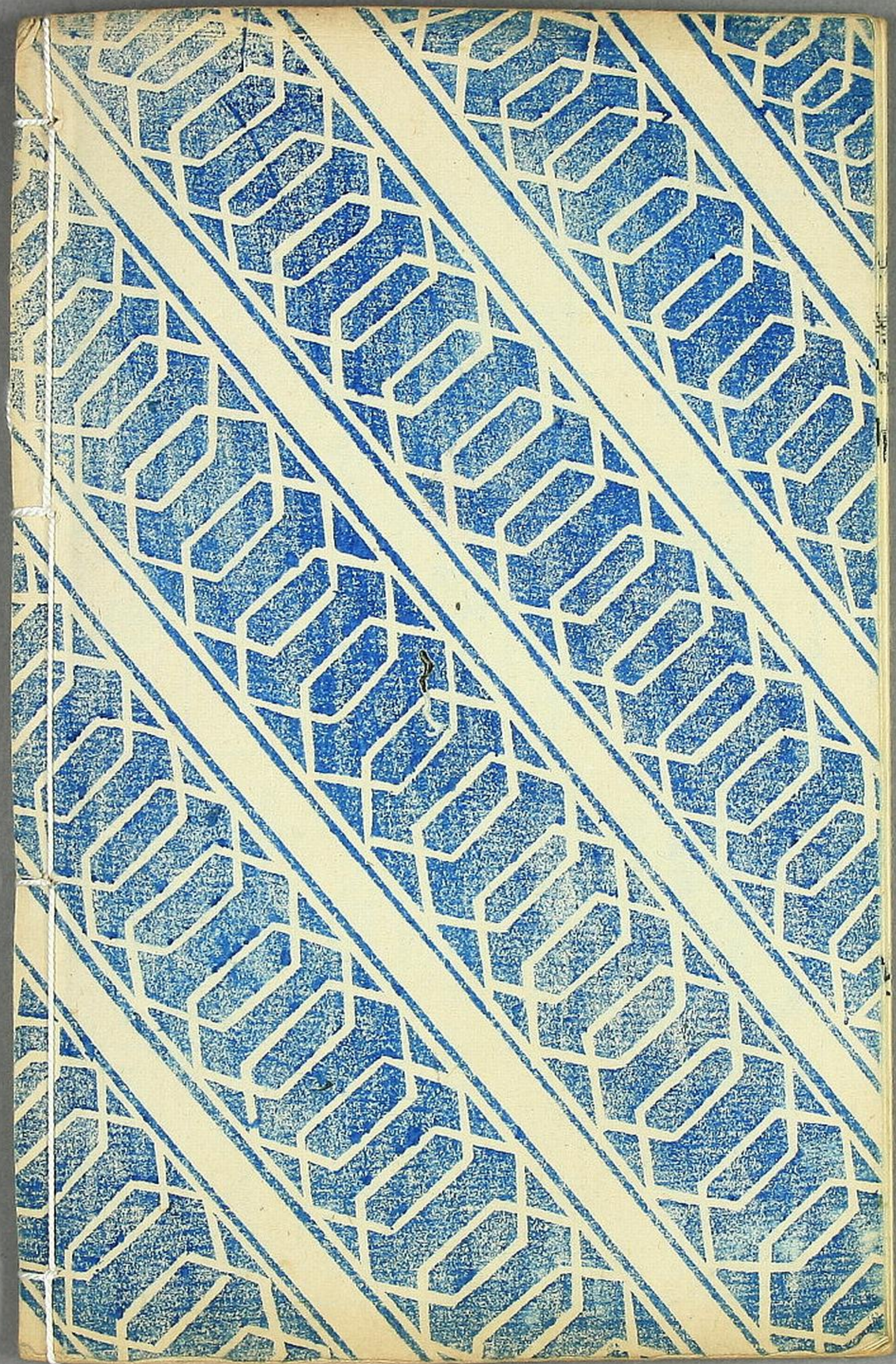
か傳ふ本女細と清と  
か傳ふ本女細と清と

か傳ふ本女細と清と  
か傳ふ本女細と清と











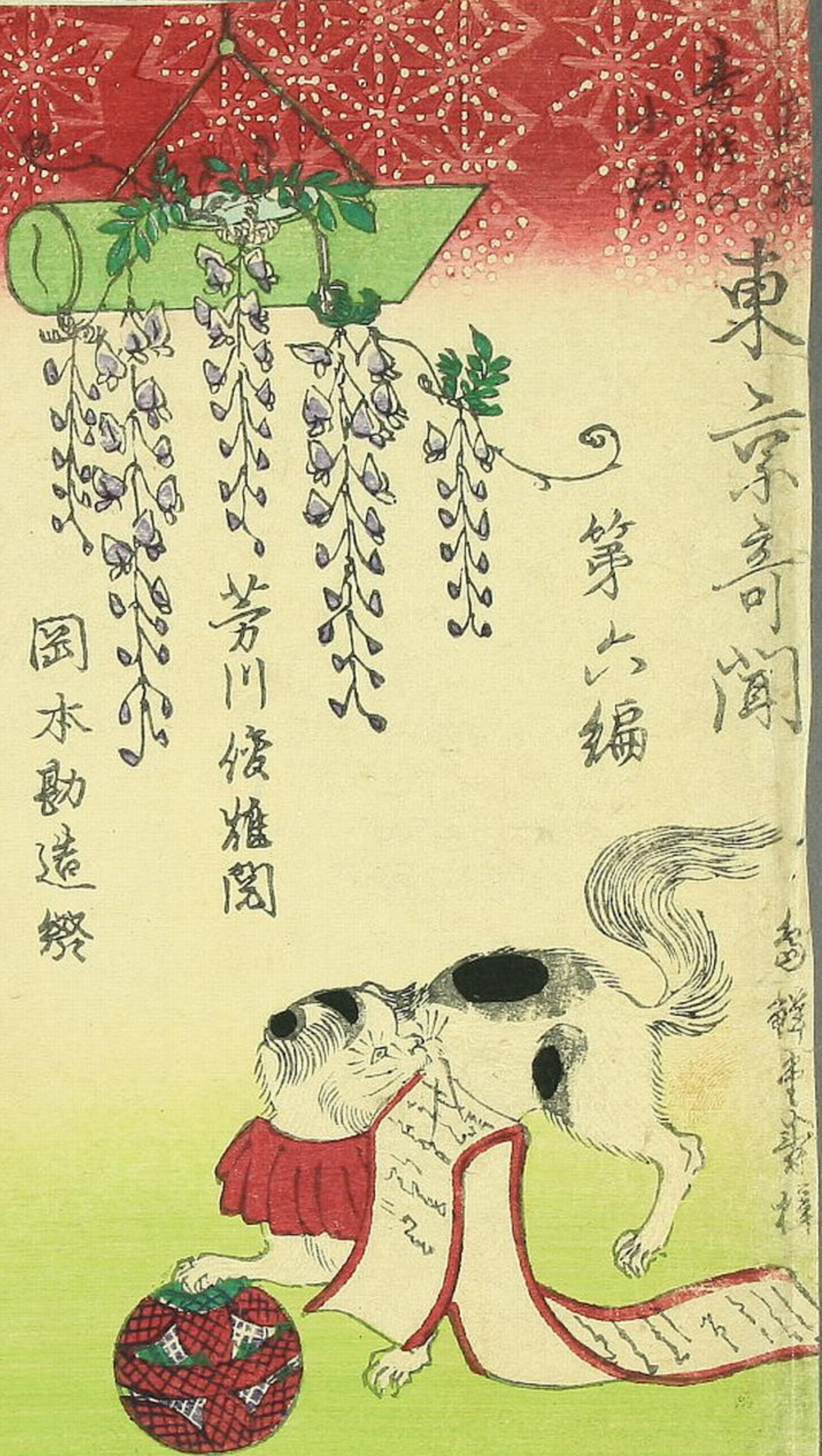
東京奇聞

第六編

芳川倭雄園

園本勲造祭

桜富貞種画



奇聞集